

# 私の一冊

歯科衛生学科 金山圭一 先生

小長谷有紀, 鈴木紀, 旦匡子編  
『ワールドシネマ・スタディーズ : 世界の「いま」を映画から考えよう』

小鹿図書館 778.2/W 39

私の祖母は、よくだまされる人でした。怪しげな人が訪ねてきて「一曲 500 円で歌います」(プロの流しでなく素人のアカペラです)とか「本を出版しますので、いくらか…」のような求めに応じていました。そんな光景に出くわすたび、孫の私は「なんで話を聞くの？すぐだまされるんだから。」とぶつくさ言うのが常でした。

今回紹介する本は、移民・家族・支援・多文化をテーマに「みんなくワールドシネマ<sup>(注)</sup>」で上映された 35 本の映画の解説本です。その中の一つ「ヒア・アンド・ゼア」の映画紹介を読んで、前出の祖母の行動について分かったことがあります。映画の主人公が「貧乏はいやだけど/金持ちでいるのはもったいや」と歌い、稼ぎを酒場の客全員に振る舞う場面が出てきます。これはメキシコの庶民にとって美しい生き方「互恵の美德～金持ちでいるより分け合おう～」の表れである、と著者は解説しています。祖母の行動の理由にも、この主人公と同じ互恵の美德があったのだと思うに至りました。

祖父母の生きてきた時代を考えると、終戦後ぎりぎりの暮らしから始まり、そこそこの暮らしに、孫のいる頃にいくら余裕のある暮らしになったように思います。ぎりぎりの暮らしの時には、助けを求めればかりで人助けは容易でなかったと想像します。互恵を美德とする身には、随分と情けない思いだったことでしょう。私の目にだまされていると映った祖母の姿は、おそらく自らの美德を守る行動をとっていただけだったのです。

私がこの本を読んで亡くなった祖母を思い浮かべたように、なつかしい人・大切な人を思い出す、そんな映画がつまっています。医療や福祉、保育に携わる皆さんは世界中から日本に来た人たちと関わります。生まれた国を離れ働く理由や、その理由に至る考えを知ることは多様な文化的背景に触れることだと思います。

解説本だけでなく、映画も観てみたいと思ってもらえたら選者として望外の喜びです。

注)「みんなくワールドシネマ」2009 年秋から国立民俗学博物館主催で「包摂と自律」をテーマとする研究に沿って実施された、研究者による解説付きの映画会。